

能登半島地震 災害ボランティア レポート

— 2024年1月1日～12月31日 —

「あなたの一歩が、被災地の未来を変える力になります」

能登半島地震では多くのボランティアが被災地の支援活動に参加し、復興に貢献しました。本アンケートでは、活動に参加したボランティアと支援団体の声を集め、今後より多くの方が参加しやすくなるための課題や改善点を明らかにすることと、能登半島地震の1年目のボランティアの記録をアーカイブすることを目的としています。

アンケートにご協力いただきましたボランティアの方、支援団体の方、ありがとうございました。

アンケートについて

- 実施期間：2025年2月7日～2月20日（13日間）
- 実施形態：webフォーム、ヒアリング（支援団体）

ボランティア（個人）向けアンケート結果

1. アンケート回答者について
2. 月毎のボランティア参加数
3. ボランティア活動先
4. ボランティア先で主に行った活動
5. ボランティア参加のしやすさ
6. ボランティア参加に困難を感じた理由
7. ボランティア参加の満足度
8. ボランティアに参加した理由
9. 今後のボランティアへの参加意向
10. 改善が必要だと感じた点
11. 改善アイデア/ボランティアの声

支援団体向けアンケート結果

1. sien sien west / おらっちゃ七尾
2. のと復耕ラボ
3. 能登町災害ボランティアセンター

回答数：83件

性別の割合

- 男性: 59.04%
- 女性: 39.76%
- 回答しない: 1.20%

年代別

- 10代: 24.10%
- 20代: 7.23%
- 30代: 14.46%
- 40代: 16.87%
- 50代: 25.30%
- 60代以上: 12.05%

ボランティア参加数

- 83人の総ボランティア参加回数：308回
- 1人あたりの平均ボランティア参加数：3.71回

災害ボランティア以外のボランティアへの参加経験

- 災害以外のボランティアにも参加したことがある：49件 (59.0%)
- 災害ボランティアしか参加したことがない：34件 (41.0%)

まとめ

アンケート回答者の属性を見ると、年齢層は幅広く、多様な世代が災害支援に参加していることが分かります。性別では男性と女性がバランスよく参加し、性別に関わらず社会貢献意識が高いことが伺えます。1人あたりの平均ボランティア参加数は3.71回と比較的高く、継続的に活動する参加者が多い点が特徴です。また、災害ボランティア以外の活動にも約6割が参加しており、普段から地域社会への関心と貢献意識を持つ人々が災害支援にも積極的に関与していることが示唆されます。

回答数：83件

参加地域

- 近畿: 33.73%
- 中部: 31.33%
- 関東: 27.71%
- 九州: 4.82%
- 四国: 1.20%
- 東北: 1.20%

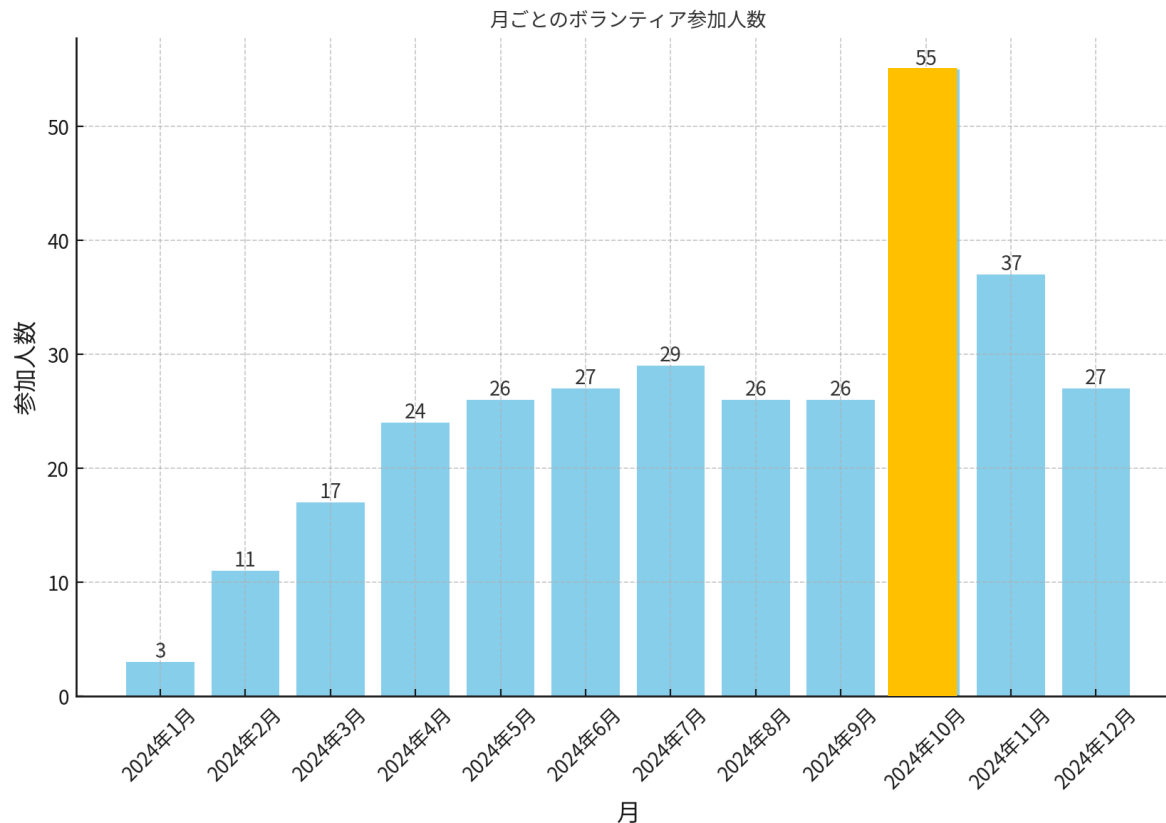
参加都道府県

- 兵庫県: 28.92%
- 愛知県: 9.64%
- 石川県: 8.43%
- 東京都: 7.23%
- 神奈川県: 6.02%
- 千葉県: 6.02%
- 熊本県: 4.82%
- 群馬県, 栃木県, 山梨県, 大阪府: 各3.61%
- 静岡県, 新潟県, 岐阜県: 各2.41%
- 埼玉県, 愛媛県, 長野県, 岩手県, 滋賀県, 福井県: 各1.20%

まとめ

ボランティア参加者は特に兵庫県や熊本県など、過去に阪神大震災や熊本地震といった大規模災害を経験した地域からの参加者が目立ち、被災経験が支援意識の向上に影響していることが示唆されます。

これにより、被災経験者が他地域の復興にも積極的に関わる連帯の輪が広がっていることが伺えます。



まとめ

月ごとのボランティア参加人数を見ると、春から夏にかけて徐々に増加し、特に10月に年間最多の参加者数を記録しました。この増加は2024年9月に発生した能登半島豪雨の影響も要因と考えられます。新たな被害に対する緊急支援の必要性が広く認識され、現地集合型の民間ボランティアセンターも立ち上がり、多くの方が支援に駆けつけたことで、参加者数が大幅に増加したと推測されます。

災害ボランティアセンター：12件（60%）

- 石川県災害ボランティアセンター：6件
- 能登町災害ボランティアセンター：2件
- 輪島市災害ボランティアセンター：2件
- 珠洲市災害ボランティアセンター：1件
- 七尾市災害ボランティアセンター：1件

民間団体：8件（40%）

- sien sien west/おらっちゃ七尾：3件
- 門前RQ能登：1件
- ボラキャンすず：1件
- 震災復興子ども支援：1件
- 町野町復興プロジェクト：1件
- のと復耕ラボ：1件



photo by のと復耕ラボ



photo by sien sien west

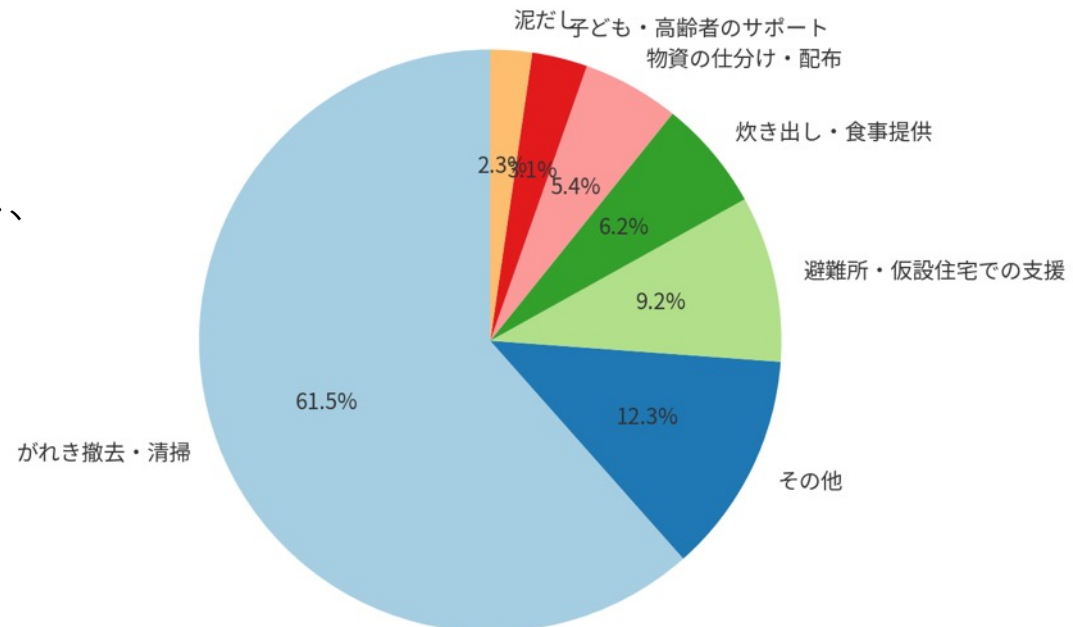
まとめ

アンケート結果から、活動先は「災害ボランティアセンター」と「民間団体」に大別されます。災害ボランティアセンターは石川県災害ボランティアセンター（6件）をはじめ、能登町、輪島市、珠洲市、七尾市など計12件で全体の60%を占めました。これに対し、民間団体はsien sien west/おらっちゃ七尾（3件）、門前RQ能登、珠洲ボラキャンすず、町野町復興プロジェクトなど計8件で40%を占めました。公的機関が広範囲で活動を支える一方、民間団体は地域密着型の柔軟な支援を提供し、双方が補完し合う構図が見られました。

【アンケート結果】 ボランティア先で主に行った活動

- がれき撤去や清掃: 61.54%
- 避難所・仮設住宅での支援: 9.23%
- 炊き出し・食事提供: 6.15%
- 物資の仕分け・配布: 5.38%
- 子ども・高齢者のサポート: 3.08%
- 泥だし: 2.31%
- その他
仮置場での分別、避難先への引っ越し、
洗浄、援農、災害VC運営支援

ボランティア先で主に行った活動の割合（1%以下はその他）



まとめ

能登半島地震のボランティア活動では、「がれき撤去・清掃」が最も多く、全体の約60%を占めました。次いで「避難所・仮設住宅での支援」、「炊き出し・食事提供」、「物資の仕分け・配布」なども行われ、被災者の生活支援に貢献しました。「子ども・高齢者のサポート」など人と直接関わる活動も見られ、多様なニーズに応じた活動が復興に重要な役割を果たしたことが示されました。

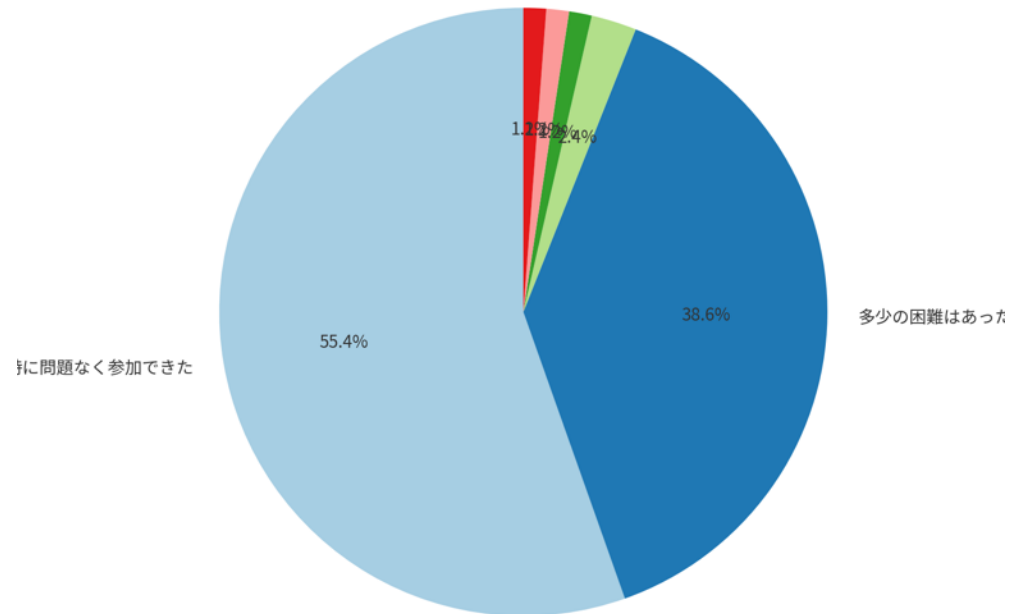
【アンケート結果】 ボランティア参加のしやすさ

- 特に問題なく参加できた: 55.42%
- 多少の困難はあったが参加できた: 38.55%
- 参加したかったが難しかった: 2.41%

その他の意見

- 募集と自分の空き時間のタイミングが合わなかった
- 県ボラ経由での参加のため受け入れ人数に制限があり困った
- 七尾市はテント村が出来て入りやすくなった
- 石川県ボラセンでは登録制のため定員数が決まっており、募集枠が多く中々入れない時もあったが支援団体の募集はスムーズに参加できた

ボランティアに参加するまでの参加のしやすさ



まとめ

アンケート結果によると、能登半島地震のボランティア活動において「特に問題なく参加できた」と回答した人が全体の約55%を占めました。一方で約39%は「多少の困難はあったが参加できた」と答え、交通手段や宿泊場所の確保、情報不足が課題として挙げられました。全体として、多くの方が参加できたものの、より円滑な受け入れ体制や情報提供の改善が今後の課題とされています。

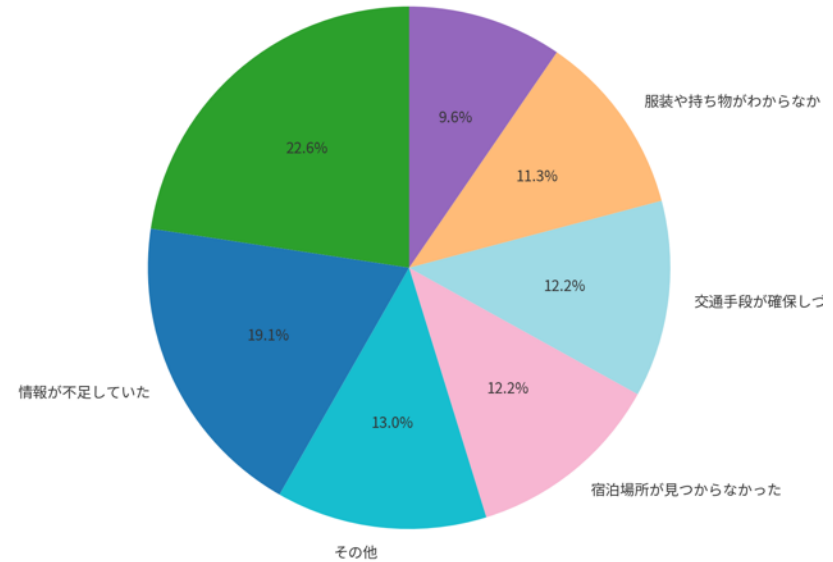
【アンケート結果】 ボランティア参加に困難を感じた理由

- 情報が不足していた: 19.13%
- 宿泊場所が見つからなかった: 12.17%
- 交通手段が確保しづらかった: 12.17%
- 服装や持ち物がわからなかった: 11.30%
- 仕事や家庭の事情で調整が難しかった: 9.57%
- その他: 22.61%

その他の意見

- 金沢からのバスでしか現地に入れず活動時間が限られた
- 石川県災害ボランティアセンターの定員オーバー
- 高速道路無料措置のための活動証明書取得の難しさ
- ボランティア募集枠の狭さや開始の遅さ
- ボランティアの予約がしにくかった
- 入浴関係の問題避難所や炊き出しなど初期ボランティア
- 長靴や粉塵マスクの準備
- 募集開始からすぐに定員オーバーとなった募集枠が少な
の上限)
- 初期は参加予約を取るのが困難だった

ボランティア活動で困難を感じた理由 (1%未満はその他、0.0%非表示、色重複なし、割合順)



まとめ

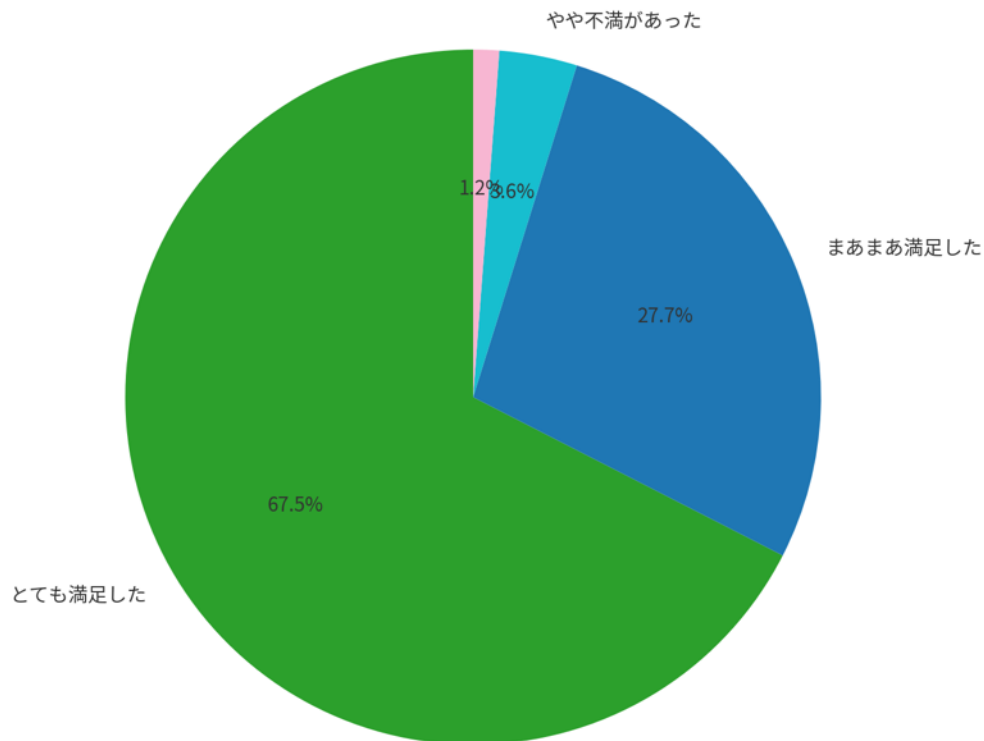
能登半島地震のボランティア活動において、参加者が感じた主な困難として「情報不足」(約19%)や「宿泊場所の確保」(約12%)、「交通手段の確保」(約12%)が挙げられました。さらに「服装や持ち物がわからなかった」や「仕事や家庭の事情による調整の難しさ」も課題として報告されました。これらの結果から、今後は参加前の情報提供や交通・宿泊支援の充実が求められています。

【アンケート結果】 ボランティア参加の満足度



- とても満足した: 67.47%
- まあまあ満足した: 27.71%
- やや不満があった: 3.61%
- 無回答またはその他: 1.20%

能登での災害ボランティア活動の満足度



まとめ

アンケート結果によると、能登半島地震のボランティア活動に参加した人の約67%が「とても満足した」と回答し、「まあまあ満足した」と答えた人も約28%にのびりました。一方で「やや不満があった」という回答は約4%にとどまり、全体として多くの参加者が活動に対して肯定的な評価を示しました。これにより、活動を通じて達成感や感謝の言葉を得たことが、満足度の高さにつながったと考えられます。

【アンケート結果】 ボランティアに参加した理由

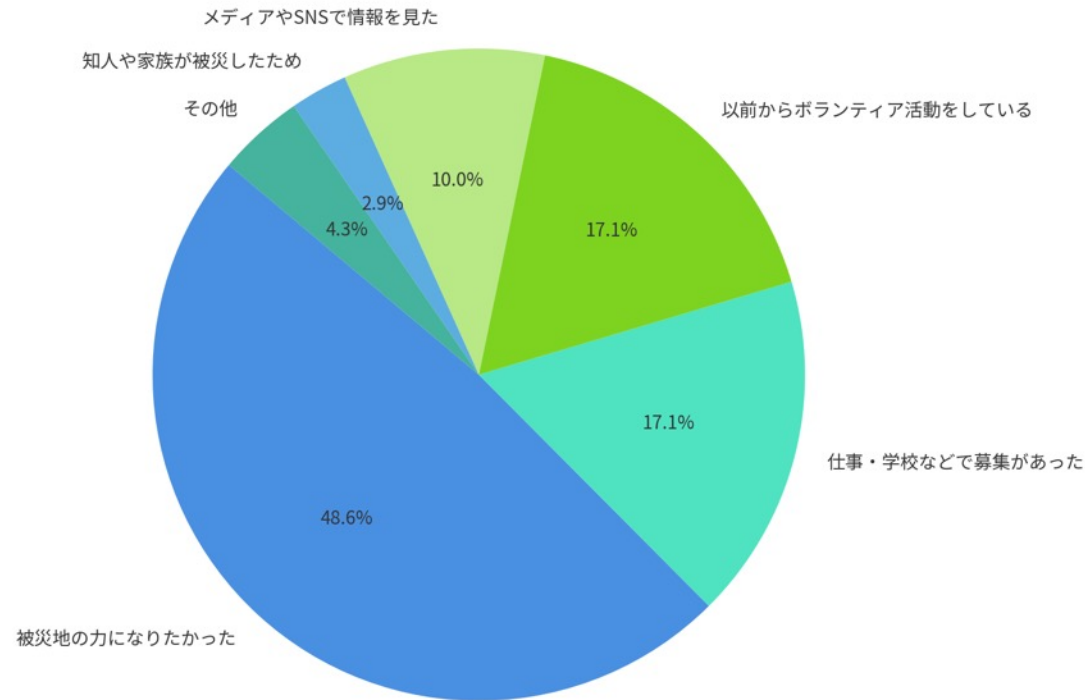


- 被災地の力になりたかった: 68 (48.6%)
- 仕事・学校などで募集があった: 24 (17.1%)
- 以前からボランティア活動をしている: 24 (17.1%)
- メディアやSNSで情報を見た: 14 (10.0%)
- 知人や家族が被災したため: 4 (2.9%)
- その他: 6 (4.3%)

その他の意見

- 知人からの誘い政治を志している為
- 政治家こそ現場に行くべきだと思ったから
- 被災者として支援者を支援したいと思った
- 元自衛隊に従事していたこともあり、どうしても見て見ぬフリは出来なかった。その経験を生かしたかった。
- 石川に縁故あり、思い出のある地
- 高速無料や装備の情報を得られたから

ボランティアに参加した理由の割合

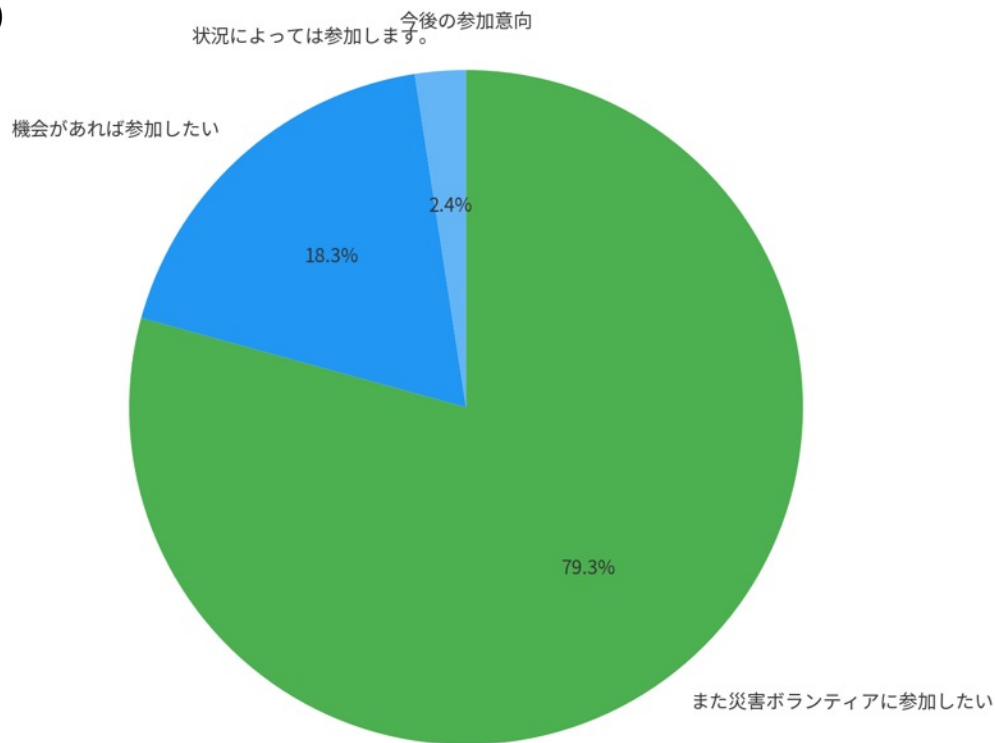


まとめ

ボランティア参加理由では「被災地の力になりたかった」が最多で、支援への思いが主な動機です。「仕事・学校での募集」や「過去の活動経験」も参加を後押ししています。一方で「メディアやSNSの情報」や「知人・家族の被災」は少数にとどまりました。今後は、情報発信や参加しやすい環境づくりを通じて、支援の輪をさらに広げることが重要です。

【アンケート結果】 今後のボランティアへの参加意向

- また災害ボランティアに参加したい: 65件 (79.3%)
- 機会があれば参加したい: 15件 (18.3%)
- 状況によっては参加します。: 2件 (2.4%)

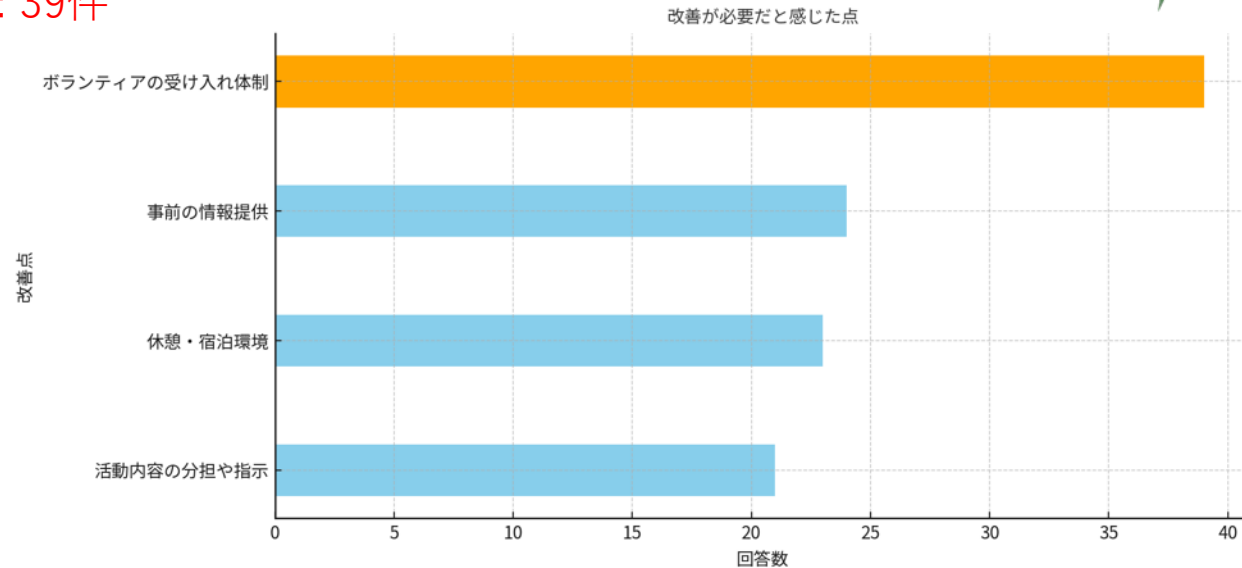


まとめ

アンケート結果によると、今後も「また災害ボランティアに参加したい」と考える人が最も多く、全体の約8割を占めました。これは、参加者が活動を通じて達成感や地域への貢献を実感したことを示しています。一方、「機会があれば参加したい」と回答した人は約18%で、時間や状況による制約がうかがえます。「状況によっては参加します」と答えた人は少数でしたが、参加意欲はあるため、参加しやすい環境の整備や情報提供を強化することで、さらなる参加促進が期待できます。

【アンケート結果】改善が必要だと感じた点

- ボランティアの受け入れ体制: 39件
- 事前の情報提供: 24件
- 休憩や宿泊環境: 23件
- 活動内容の分担や指示: 21件



その他の意見

- 地元の方の力が必要になります。『地元の人が地元を支える』そんなきっかけを作る為にも県民のボランティア参加希望者は優先されるべきだと感じました
- 高速道路無料やボランティア用宿泊施設がある事の情報発信
- 参加者の作業時の危険性や破傷風等の感染症に対する認識の甘さ
- 特殊技術を持った人の募集や段取り
- 活動内容によって持ち物や服装が変わるので事前に活動内容を決定できると良い

まとめ

アンケート結果から「ボランティアの受け入れ体制」（39件）が最も多く、全体で最優先の課題であることが分かりました。次いで「事前の情報提供」（24件）、「休憩・宿泊環境」（23件）、「活動内容の分担や指示」（21件）が挙げられました。これらの結果から、参加者はスムーズな受け入れや十分な情報提供、快適な休息環境を重視していることが明らかです。特に初めて参加するボランティアにとって、活動内容の明確化と事前の準備支援が重要なポイントとなります。



ボランティア活動自体に関すること

- 1回目の参加がハードル高い、高速道路無料措置の申請や情報交換の不足。
- 毎回名前を変えて金儲けの為だけに入り込んでくる悪質な団体は審査して排除すべき。
- 作業マニュアル等があれば安全な作業ができる。
- ボランティアセンターにライブカメラを設置し、貸出機具や提供物資を可視化することで持参する装備を検討しやすくする。
- 事前にある程度活動内容が分かるとありがたい。
- 受け入れ体制を拡充することで参加人数を増やすことができる。
- ボランティアを支える現地スタッフの食事、物資、生活環境の改善が必要。国の財政的支援を求める。
- ボランティア募集枠は減少しているが、まだ支援を必要とする人が多い。ニーズ調査を通じて実態を把握する必要がある。
- ボランティアセンターのスタッフはもう少し改善が必要。
- ボランティアの内容を事前に把握することで、より適材適所に活動ができる。



交通・アクセスに関すること

- 新幹線やバスでも交通費免除を検討してほしい。高速料金以外の費用負担も軽減されるべき。
- ボランティアに行きたい人が乗り合いできる交通手段があれば長期間の活動がしやすい。
- 高速道路の無料減免期間が短く、移動に余裕がない。交通費や宿泊費の助成を拡充し、ボランティア活動を促進するべき。
- 能登方面では交通路線に限りがあり、参加できる人が積極的に行く必要がある。
- 全国統一した交通手段の助成制度を設ける。
- 県ボラの募集が縮小し週末のみの活動となっているが、まだ支援が必要な人が多い。交通費や宿泊費の負担が大きい。

ボランティア関連の制度に関すること

- 県ボラの募集枠を拡大し、枠に溢れた希望者を民間団体へ案内する仕組みを作る。
- 宿泊施設や入浴施設の利用を改善する。
- 宿泊費やJRなど公共交通機関の費用補助を導入する。
- ボランティアが来てくれるのが当たり前になっているけどもっと国は考えてほしい。

情報発信に関すること

- 2025年3月31日を目処に撤退していく団体が増える中、情報発信を継続して支援を促進する必要がある。
- 災害現場では「助けてほしい」と発信できない高齢者が多いため、そのサポート方法を考える必要がある。

まとめ

アンケート結果から、能登のボランティア活動における課題は「活動環境」「交通・アクセス」「制度」「情報発信」の4点に集約されます。活動面では受け入れ体制や作業マニュアルの不足が指摘され、交通では移動手段や費用負担が障壁となっています。制度面では募集枠の拡大や宿泊施設の改善が求められ、情報発信では高齢者を含む支援ニーズの掘り起こしが課題です。これらの改善により、より多くの人々が継続的かつ安心して参加できる環境が整備されることが期待されます。

1. ボランティア参加者の実態と傾向

アンケート結果から、多くの回答者が複数回ボランティア活動に参加し、平均参加数は3.71回と高水準でした。また、約6割が災害以外のボランティア経験もあり、地域貢献意識の高い人々が被災地支援にも積極的に関わっていることが分かります。男女比や年齢層も幅広く、性別や年齢に関係なく多様な人が参加していることが特徴です。

2. 活動における課題と改善点

活動面では、受け入れ体制の充実や作業マニュアルの整備が求められており、特に初めて参加する人にとっては情報不足が課題となっています。交通面では、高速道路の無料措置や交通費補助が助けになっているものの、制度の周知不足や移動手段の限界が参加の障壁となっています。また、宿泊や休憩環境の改善も、継続的な活動には欠かせません。

3. 今後の支援継続の重要性

「また災害ボランティアに参加したい」と回答した人が多数を占める一方で、情報不足や参加までのハードルの高さが参加をためらう要因となっています。また、被災者の中には遠慮して支援を求めない人も多く、さらなるニーズの掘り起こしが必要です。

まとめ

まだまだ能登へのボランティア支援は必要

アンケート全体から、能登半島では引き続き多くの支援が必要であることが明らかです。活動の継続を促進するためには、受け入れ体制や情報発信の強化、交通費補助の拡充など、参加者がより気軽に、そして安心して活動できる環境を整えることが重要です。今後も多くの人々が継続して支援に関わることで、地域の復興がさらに加速することが期待されます。

団体概要

- 団体名：一般社団法人sien sien west
- 活動エリア：七尾市
- URL：sien sien west <https://www.facebook.com/p/Sien-sien-west-61552951553071/>
おらっちゃ七尾 <https://oratchananao.hp.peraichi.com/>

一般社団法人sien sien westは七尾市の石崎町を拠点にし、発災直後から支援活動を開始し、多くのボランティアを受け入れてきた。拠点のある元保育園ではボランティアが宿泊することも可能で、ボランティア活動先として人気の理由となっています。

また10月からは七尾市の協力のもと、民間ボランティアセンター「おらっちゃ七尾」を立ち上げ、行政や民間団体が連携をして七尾市の災害支援を実施しています。



一般社団法人Sien Sien West ボランティア参加者推移

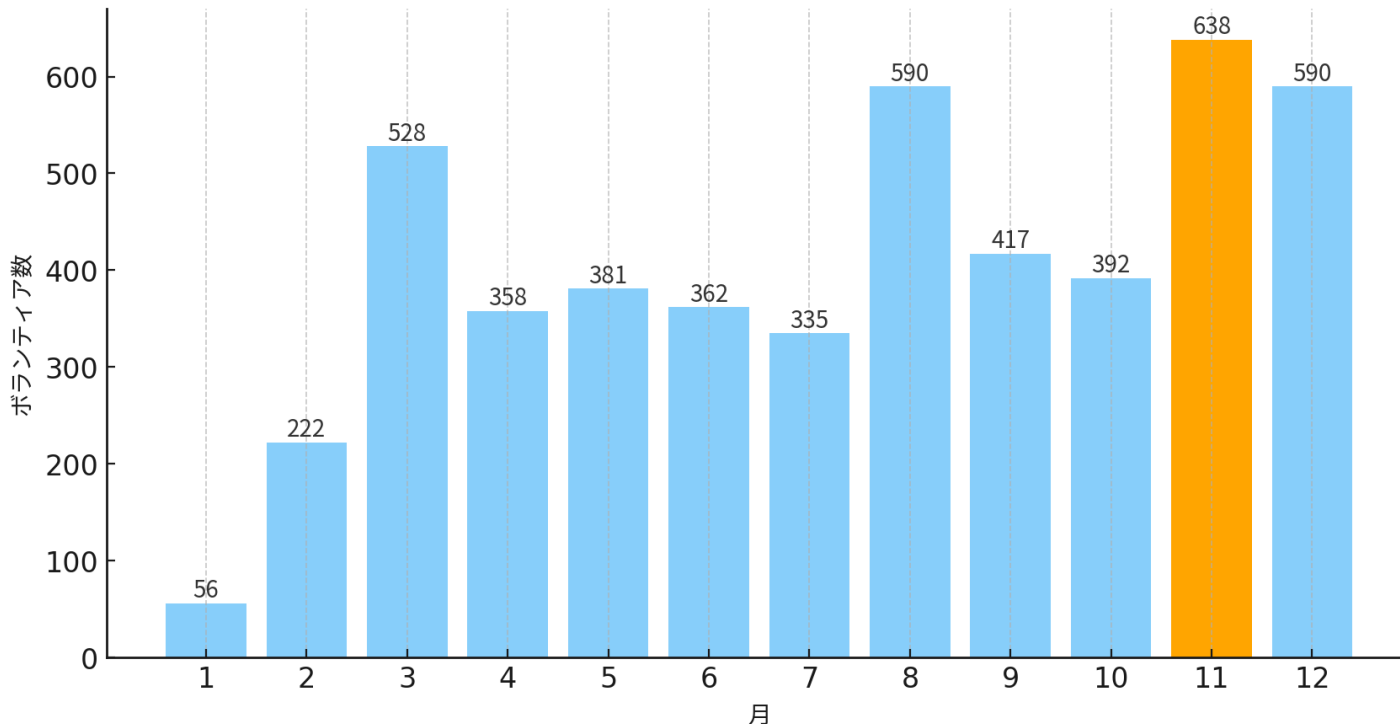


photo by sien sien west

九州の支援団体であるsien sien westが能登に入ったのが1月3日。物資支援をしつつ、各地を周り、最終的に七尾市の石崎町を拠点にし、ボランティアを募集しながら様々な復旧支援活動や復興支援活動を実施してきました。

拠点で宿泊できるという点や、駅から徒歩圏内に拠点があること、奥能登よりも七尾が手前にありアクセスがいいという点などから、ボランティアにとっては参加しやすい環境が整っています。また通常だと事前予約をしないとボランティア活動できないところがほとんどだが、急遽の参加も受け入れをしてくれる懐の深さも、ボランティアが多く参加する要素の1つ。

年間を通じて継続的にボランティアを受け入れ、10月からは七尾市の協力のもと、民間ボランティアセンター「おらっちゃ七尾」を立ち上げさらに多くのボランティアと一緒に活動を実施しています。

緊急支援フェーズ
(1～3月)

復旧支援フェーズ
(4～6月)

復興支援フェーズ
(7月～)

活動内容

- ・ 避難所運営サポート
- ・ 在宅避難者支援
- ・ 物資支援

- ・ 家財搬出
- ・ ブロック撤去
- ・ 継続的な物資支援
- ・ ソフト系支援

- ・ 仮設住宅
- ・ 地域イベント
- ・ 心理的ケア
- ・ 長期的なソフト支援



photo by sien sien west

まとめ

緊急支援フェーズ (1～3月) で計806人、復旧支援フェーズ (4～6月) で1,101人、復興支援フェーズ (7月～) で3,962人と、後半にかけて増加しました。初期は避難所支援や物資提供が中心でしたが、4月以降は作業系支援が増え、復旧活動へ移行。7月以降は長期的な復興支援が主体となり、ボランティアの需要が継続しています。支援のフェーズごとに異なるニーズが出てきており、ニーズに対応した活動を実施しています。

団体概要

- 団体名：一般社団法人のと復耕ラボ
- 活動エリア：輪島市三井町
- URL：<https://sites.google.com/view/noto-fukko-labo/home>

「のと復耕ラボ」は、輪島市三井町を中心に活動を行う有志の民間団体です。復興支援の拠点として民間ボランティアセンターを運営し、ボランティアの受け入れや調整を行っています。また、解体される建築物から古材を回収・再活用する古材レスキュープロジェクトや、被災地の自然環境を再生する森づくりプロジェクトを推進し、地域の文化・資源を守りながら持続可能な復興を目指しています。

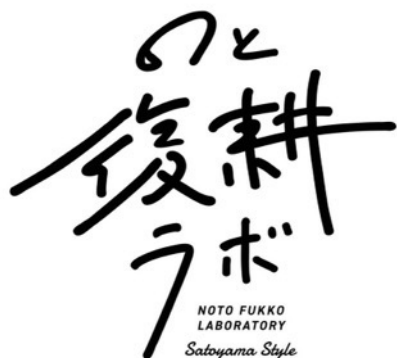


photo by のと復耕ラボ

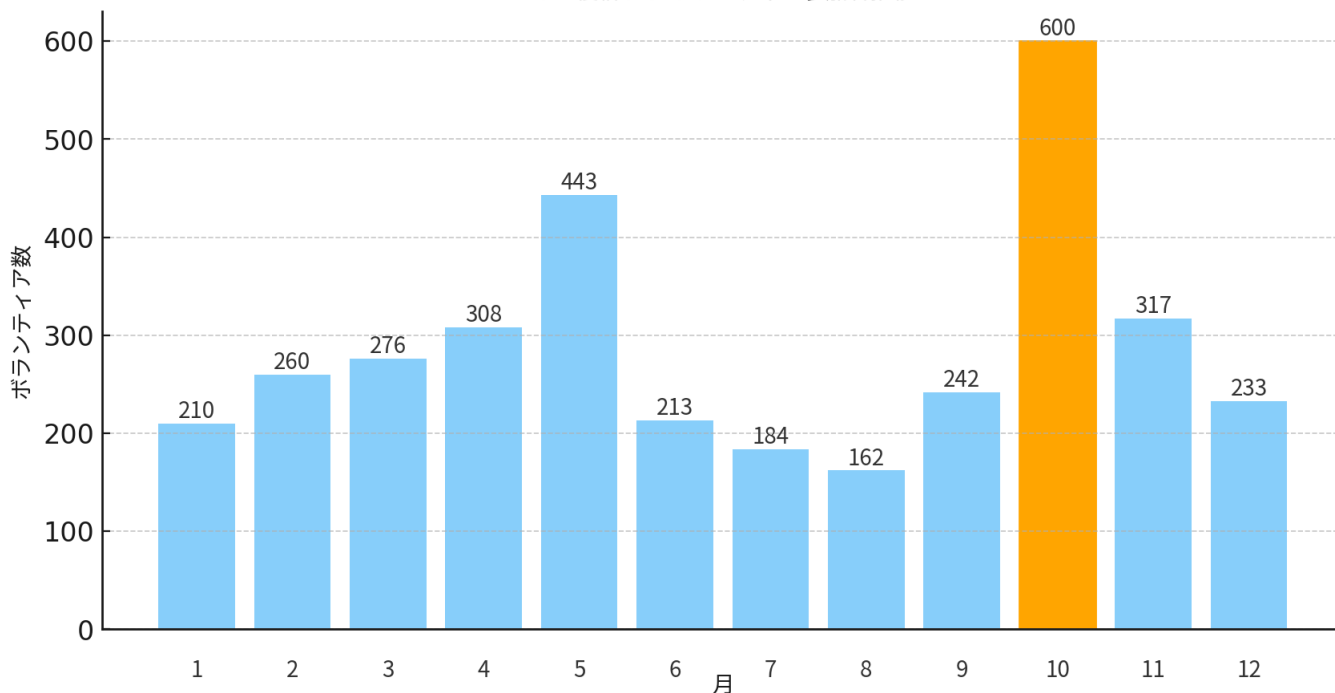
【団体アンケート】のと復耕ラボ



NPO法人
ボランティアインフォ



のと復耕ラボ ボランティア参加者推移



2024年1月1日より前から輪島市三井町の古民家レストラン茅葺庵を中心に三井町にコミットして活動をしていた山本さんを中心に震災後に立ち上がった「のと復耕ラボ」。

レストランだった茅葺庵をボランティアが宿泊できる拠点にし、発災直後からボランティアを継続的に受け入れ、ボランティアと一緒に地域の様々な課題を解決してきました。

がれきや不用品の撤去などの復旧支援をしつつ、古材のレスキューなど、地域の資源を残していく活動も展開。

9月の水害被害後、ニーズが一気に増えボランティア参加者数が多くなっているが、常にボランティアを受け入れていることがわかります。



photo by のと復耕ラボ

緊急支援フェーズ (1～3月)

復旧支援フェーズ (4～6月)

復興支援フェーズ (7月～)

活動内容

- 道路啓開
- 物資の配布
- 貴重品レスキュー
- がれきや不用品撤去
- 子供の見守り

- 貴重品レスキュー
- がれきや不用品撤去
- 子供の見守り
- 農業支援

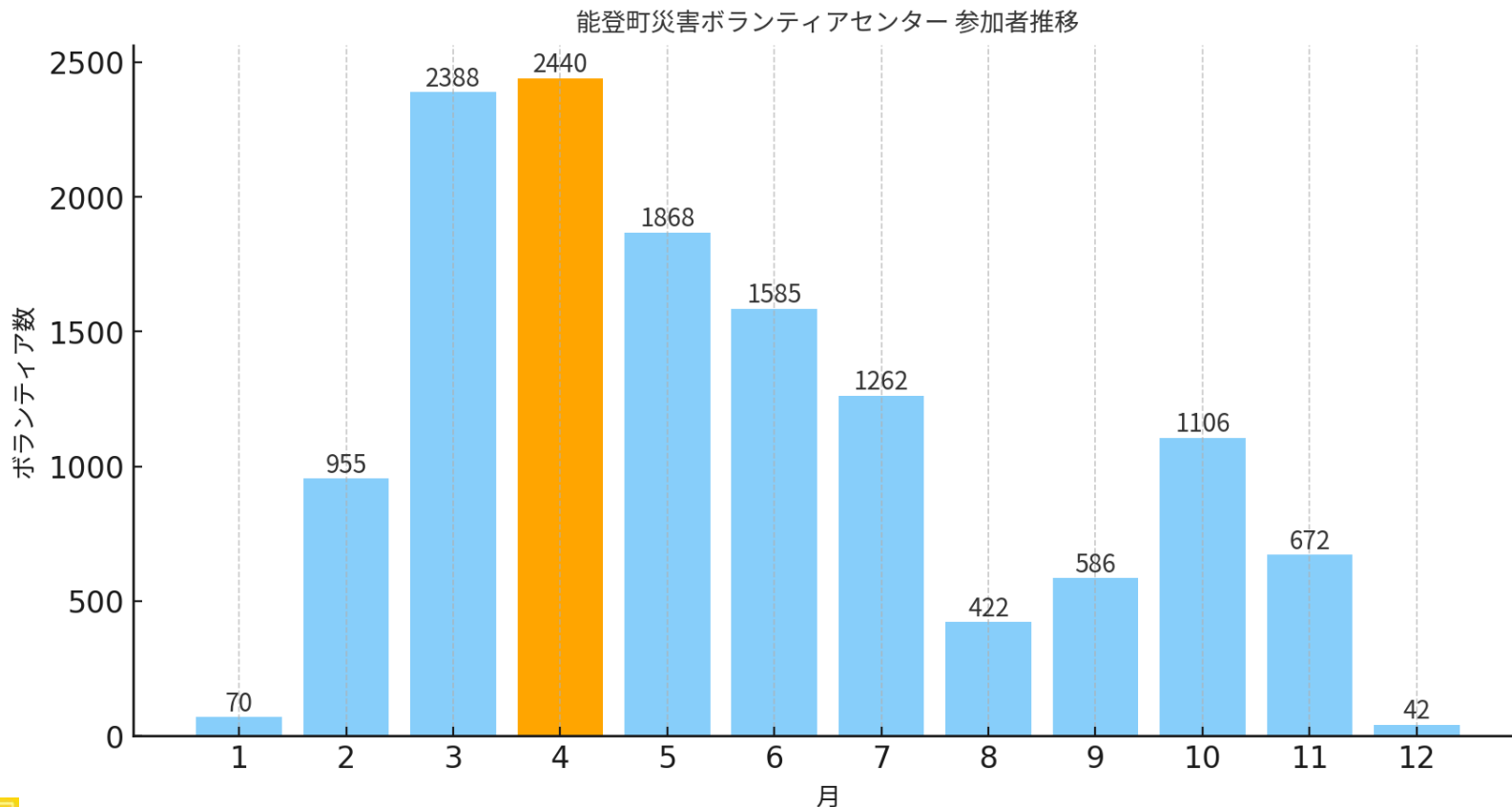
- 水害対応
- 古材レスキュー
- がれきや不用品撤去
- 重いものの運び出し



まとめ

photo by のど復耕ラボ

「のど復耕ラボ」のボランティア活動は、緊急支援期（1～3月）の道路啓開や物資配布から始まり、復旧期（4～6月）には貴重品レスキューやがれき撤去が中心となりました。復興期（7～12月）には農業支援や古材レスキューに加え、9月後半の能登半島豪雨による水害対応も実施。10月にはボランティア数が最多となり、復興に向けた活動が本格化しました。支援の形を変えながら、三井町の再生を力強く支えています。



まとめ

2024年の能登町災害ボランティアセンターの参加者は、1月26日のプレオープン後に増加し、2月から石川県災害ボランティアセンターのボランティアバスの受け入れ開始で急増しました。4月が最多（2440人）で、春に支援が集中。

10月は9月末の能登半島豪雨の影響で再び増加。夏以降は町内のニーズが少なくなり減少傾向となりました。

東日本大震災との比較

1. ボランティアの視点

- 東日本大震災: 全国的な注目度が高く、大規模なボランティア動員が早期に実現
- 能登半島地震: アクセスの難しさや認知度の違いにより、初期の動員数は少なかったが、リピーターの増加により継続的な支援が現在も行われている

2. 支援フェーズの視点

- 東日本大震災: 被害範囲が広大だったが、多くのボランティアが一気に参加したことでニーズ解消のスピードは早かった
- 能登半島地震: 地域ごとに被害状況が異なり、比較的早く復旧フェーズへ移行した場所もある。9月の水害により復興期でも緊急対応が求められる場面があった

3. 交通や宿泊拠点の視点

- 東日本大震災: 宿泊場所が多く、全国からのボランティアが滞在しながら支援活動を行うことができた
- 能登半島地震: 宿泊施設が限られ、宿泊拠点を持つ団体にボランティアが集中。一方で、多くのボランティアは石川県災害ボランティアセンターが運行する日帰りバスを利用してボランティア活動に参加した

1. 支援活動の特徴

- 発災直後から多くの支援団体が活動を開始し、継続的なボランティア受け入れが行われた
- 復旧、復興の各フェーズに応じて、活動内容が変化
- 行政や民間団体との連携が進み、地域資源を活かした支援が展開

2. ボランティアの推移

支援フェーズの変化はあるが、そのフェーズにあった支援活動にボランティアが参加できるようにボランティアコーディネートできている団体には、継続的にボランティアが参加し、一度参加したボランティアは再度リピートする構造ができています。

- 緊急支援（1～3月）：避難所支援や物資提供が中心
- 復旧支援（4～6月）：がれき撤去や家財搬出などの作業支援が増加
- 復興支援（7月～）：長期的かつ様々な支援が必要となる

3. 9月に発生した能登半島豪雨

能登半島地震から半年以上が経過し、復旧が少しずつ進んでいる中で、9月後半に能登半島豪雨が発生。広い範囲で大きな被害が出たことで、それまで参加したことがあるリピーターのボランティアを中心に、ボランティア参加も一気に増えました。

まとめ

能登半島地震の支援活動は、被災状況や時期に応じて変化しながら継続している。ボランティアは、能登半島豪雨後の10月や11月がピークとなったところ多いが、今後も長期的な復興支援が求められています。支援団体の連携や地域の課題を踏まえた取り組み、そして継続的なボランティアの受け入れ体制作りが、持続可能な復興の鍵となっていきそうです。